日本英学史学会　第 62 回全国大会

プログラム・発表概要

期日　2025 年 10 月 11 日(土)～12 日(日)

会場
桜美林大学　淵野辺プラネットキャンパス（PFC）　PF307 教室

日本英学史学会本部事務局連絡先
拓殖大学政経学部
矢ヶ崎　邦彦　研究室内
E メール：kyagasak@takushoku-u.ac.jp

主　催

【協力学術研究団体】
日本英学史学会
Historical Society of English Studies in Japan

大会日程

●10 月 11 日(土)

12:30　開場・受付開始《PF307 教室前》

13:00　開会の辞　　司会：　矢ヶ崎　邦彦（事務局長）
　　西口　忠（会長）

13:10～14:45　総会
　　総会司会：　矢ヶ崎　邦彦（事務局長）
　　1. 学会活動報告：　西口　忠（会長）
　　2. 会計報告：　矢ヶ崎　邦彦（仮会計委員）
　　3. 学会賞発表：　飛田　良文（学会賞選考委員長）
　　4. 支部活動報告：　各支部長

15:00～16:00　記念講演　　榑松かほる先生（桜美林大学名誉教授）
　　題目「桜美林学園の歴史　　――日中戦争下の崇貞学園――」

概要：桜美林学園は、2021 年百周年を迎えたが、創立は 1921 年北京朝暘門外に清水安三と美穂夫妻によって開設された崇貞工読女学校にさかのぼる。学園の組織としての歴史は、1945 年までの崇貞学園時代と 46 年以降の桜美林学園時代に分けられるが、創立者たちの教育への理念と実践は一貫している。1935 年以降の崇貞学園を取り上げ、戦争とどう向きあい、学園の教育実践があったのかを検証したい。

榑松かほる先生のご経歴
立教大学大学院修士課程修了（専攻教育学）。

著書
単著『小泉郁子の研究』学文社、2000 年
共著『戦時下のキリスト教主義学校』教文館、2017 年
共編『小泉郁子教育論集』全 5 巻　桜美林大学出版会　論創社　2023～25 年

16:00　事務連絡
　　矢ヶ崎　邦彦（事務局長）

17:00　懇親会

≪大会役員≫

全国大会会長：　飛田　良文　　大会実行委員長：　松久保　暁子
大会実行委員：　西口　忠, 増井　由紀美, 保坂　芳男, 矢ヶ崎　邦彦

●10 月 12 日(日)《PF307 教室》

10:00～11:55　研究発表【午前の部】 司会: 矢ヶ崎 邦彦

10:00～10:35「札幌農学校 1～5 期生の学習履歴:福島県人編」
赤石 恵一（日本大学）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）
10:40～11:15「学習英和辞典の発展にみる学習英英辞典の影響」
松久保 暁子（桜美林大学）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）
11:20～11:55「日本の性崇拝からみた英学史と神道学史―シカゴ大学人類学部を中心に―」
佐藤 教通(國學院大學大学院生)
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）

12:00～13:00　写真撮影・昼食

13:00～15:40　研究発表【午後の部】 司会: 保坂 芳男

13:00～13:35「英文法と蘭文法は何が違うのか――『和蘭語法解』に見られる英文法」
岡田 和子（筑波大学(非常勤)）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）
13:40～14:15「宣教師ベッテルハイムの布教と医療－1846-1847 年琉球における活動の実態－」
大前 義幸（岩手県立大学）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）
14:20～14:55「歴史家朝河貫一と英文学:イェール時代の読書および論文を資料に」
増井 由紀美（敬愛大学）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）
15:00～15:35「駒井権之助に関する新たな情報－写真・肖像画資料、国際ペンと日本ペンクラブ－」
西口 忠（桃山学院史料室 特別研究員）
（プレゼン 25 分 質疑 10 分）

15:40 閉会の辞
飛田 良文（大会会長）

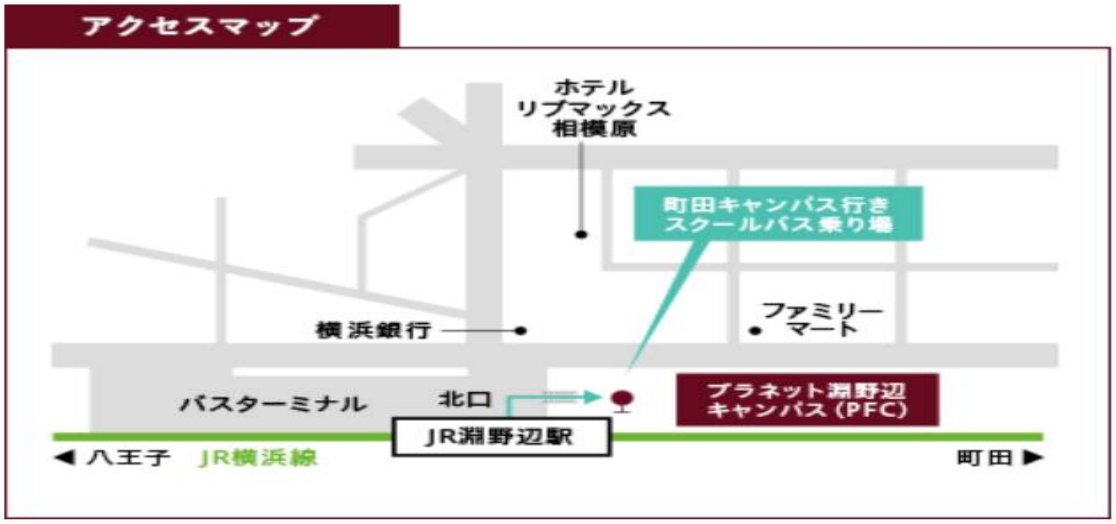
≪参加費≫

＊2000 円（事前振り込み制）
＊当日は会場受付にて出欠の確認にご協力ください。

≪諸注意≫
＊大会出席の折には，各自，本プログラムを印刷のうえご用意ください。
＊会場内は禁煙です。所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。
＊会場における録音・録画はお断わりしています。ご了承ください。
＊発表時にハンドアウトを用意される方は，20 部程度印刷のうえご用意ください。
＊会期中，大学構内の売店は閉まっています。昼食はあらかじめご用意ください。淵野辺駅構内および周辺に食料品店がございます。

≪交通≫
JR 淵野辺駅から PFC までのアクセス
JR 横浜線 淵野辺駅北口から徒歩 1 分(改札は 1 か所です)

桜美林大学 プラネット淵野辺キャンパス PF307 教室
<PFC までのアクセス>
https://www.obirin.ac.jp/access/fuchinobe/



※10/12(日)は、1F の入り口が閉まっております。
改札を出て、右手に進むと PFC につながる橋がありますので、橋を渡って 2F 入口からお入りください。

発表概要　午前の部

札幌農学校 1～5 期生の学習履歴：福島県人編

赤石　恵一（日本大学）

札幌農学校は 1876（明治 9）年 8 月に開校した開拓使の高等教育機関である。当時マサチューセッツ農科大学の学長だった W. S. Clark が教頭として招聘され，その教育にあたった。教師は漢学を除くほかみな Clark の教え子だったアメリカ人であり，その教授言語は英語であった。英語イマージョンということになる。初期（1～5 期）卒業生の英語熟達度の高さは先行研究によりこれまでも指摘されてきた。しかし，彼らが札幌農学校入学までそのような熟達度に達するまでどのような学習を行ってきたのか，その経歴や学習の実態を明らかにした研究はなく，何人かの学生に関してはその生年や出自すら公にされてこなかった。本発表は，発表者が継続している札幌農学校 1～5 期卒業生 70 名を対象とした英語学習成功者研究の一断片である。福島県人 5 名に焦点を絞り，その出生から札幌農学校入学までの学習の軌跡を辿ったうえ，その共通点や特徴を考察する。後に北海道庁鉄道部建設課長となった 1 期生佐藤勇，会津中学校校長等となる 3 期生中根明，明の弟で貝島鉱業常務取締役となる中根寿，岡山県師範学校教諭等となる佐瀬辰三郎，海軍大主計となる結城祥吾ら4期生が対象である。ただし，1 期生佐藤勇の学習履歴に関しては本学会第 59 回全国大会（2022）で既に発表済みである。

学習英和辞典の発展にみる学習英英辞典の影響

松久保 暁子（桜美林大学）

近年、翻訳ツールや無料のオンライン辞書の普及により、冊子版辞書を使用する英語学習者は減少傾向にある。スマートフォンやタブレット端末の浸透に伴い、学習者はより手軽に情報へアクセスできるようになり、デジタル辞書の利用が主流となりつつある。しかし、日本における学習英和辞典の出版状況を概観すると、2000 年以降も各レベルに対応した冊子版の学習英和辞典が出版され続けている。特に 2020 年度以降、初級者向けの英和辞典が版を重ねて出版されていることから、中学校や小学校などの教育現場、あるいは小中学生の間で、冊子版辞書に対する一定の需要が依然として存在していることが示唆される。

本発表では、このように現在でも継続して出版されている学習英和辞典の発展を通時的に考察することを目的とする。具体的には、英語初学者向けの学習英和辞典として 1929 年に研究社から出版された『新英和中辭典』を起点とし、以降の辞典の変遷をたどる中で、学習英英辞典が学習英和辞典に与えた影響について検討する。特に、本格的な初の学習英英辞典とされる *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（ISED）が導入した、名詞の可算・不可算の区別、動詞型の提示、見出し語の選定基準といった記述方針が、後の学習英和辞典にどのように取り入れられたかを、辞書のまえがきでの記述や、各語の具体的な記述を通して実証的に分析する。

日本の性崇拝からみた英学史と神道学史―シカゴ大学人類学部を中心に―

佐藤　教通（國學院大學大学院生）

本発表では、日本の神道研究において生殖器崇拝がいかに着目されてきたのか、その学史的経緯を明らかにする。近代的な生殖器崇拝研究の初発は、シカゴ大学におけるエドマンド・バックリーの研究に求められる。バックリーは『Phallicism in Japan』（1895）を通じて、日本の性崇拝を国際的な宗教学・人類学の文脈に導入した。さらに、この知見を近世までの神道研究と接続し、理論的に体系づけたのが W.G.アストンである。こうした明治期の動向があったからこそ、昭和期に加藤玄智や D.C.ホルトムが生殖器崇拝に注目することが可能となった。また、民俗学における道祖神研究も、バックリー以来の研究基盤を踏まえつつ独自の発展を遂げたと位置づけることができる。

この両系統の研究に共通して関わっていたのが、シカゴ大学人類学部教授であり、当時「お札博士」とも呼ばれたフレデリック・スタールである。スタールは、生殖器崇拝―道祖神研究のパイオニアであった出口米吉にバックリーの著書を貸与し、日本の研究者と欧米の学術成果を媒介した。また、バックリーがシカゴ大学博物館で企画した日本展示においてもスタールは主幹的役割を担い、資料収集や展示活動を通じて日本宗教の国際的発信に貢献した。

本発表では、このようにスタールを媒介点としながら、バックリー、アストン、加藤、ホルトム、さらに民俗学の道祖神研究といった複数の系譜がどのように交錯したのかを検討することで、近代神道研究における生殖器崇拝研究の意義を再評価する。

発表概要　午後の部

英文法と蘭文法は何が違うのか
――『和蘭語法解』に見られる英文法――

岡田和子（筑波大学（非常勤））

江戸時代の蘭語学習に関して、これまでは、英文法の眼で蘭語を見ると判断を誤るという話だったが、今回は逆に、これは英文法だけが持つ特徴で、蘭、仏文法にはない、という話である。

藤林普山の『和蘭語法解』（オランダごほうげ）は、オランダ語の文法書だと理解されている。しかし、これには英語にしかない要素が入り込んでいる。即ち《許可法》Potential Mood、《缺助言》Defective verb、助動詞（疑問・否定および強意）としての do の存在である。

《許可法》とは Modus の一種で、＜I can love＞のような話法の助動詞を用いるのが特徴だ。そして、この can, may, shall, will 等が、かつての英語では、活用の一部が欠損した《缺助言》Defective verb として扱われる。

ところが、当時の蘭文典では、話法は直説、附説、使令、不定の 4 つで、kunnen, moogen zullen 等の話法の助動詞は、過去分詞を持ち、完了形を作ることができ、te を付けて不定詞をも作れる本動詞である。しかも蘭語では、doen を用いて疑問・否定・強意の文章は作らない。要するに、《許可法》と《缺助言》と do への言及があったら、それは英文法だということになる。

普山が用いた原典は、日本には残っていないが、V. J. Peyton の Nieuwe Engelsche Spraakkunst.（筆者が閲覧できたのは 1779 年出版の第 2 版）ではないかと思われる。普山自身の言、及び寄せられた序文から察するに、『和蘭語法解』は Sewel 他数氏の蘭文典に Peyton＜百乙東＞の英文典を合わせたもののようだ。

当然、英文典の要素は、従来の蘭文典にはない目新しいものだが、それゆえの矛盾も抱え込むことになった。例えば、《缺助言》10 個の中に doen, hebben, worden が入っている。後 2 者は完了と受け身の《助言》だが欠損はなく、doen は《助言》ではない。要するに、これらの置き場が蘭文典の中にはないので、《缺助言》の中に押し込んだのである。

『助字要訣』は Peyton のもう一つの和訳で、普山の師である美濃の江馬家に残る筆写本である。これには随所に＜「イギリス」語ハ…、和蘭ハ…＞という按文がある。ところが、説明は英文法だが例文が蘭語のみなので、折角の考察も理解できない。例えば、英語の否定は not を＜助活ノ間二置ク＞のだが、その例文が蘭語の ik beminne niet. のみで＜I do not love.＞がない（do が助語、love が活語）。蘭語で書かれた英文典の、蘭語対訳の部分だけを用いたためだ。

結論：《許可法》と《缺助言》があれば、表向きは蘭文典でも、中身は英文法である。

宣教師ベッテルハイムの布教と医療
－1846–1847 年琉球における活動の実態－

大前 義幸（岩手県立大学）

本発表は、19 世紀半ばに琉球王国に滞在した英国宣教医バーナード・J・ベッテルハイム（1811–1870）が、1846～1847 年に展開した布教活動と医療活動の実態を明らかにすることを目的とする。ベッテルハイムは 1845 年に英国ポーツマス港を出航し、家族を伴って東アジアを目指し、翌年 2 月に那覇に到着した。滞在先は那覇港付近であり、当時の琉球社会は仏教・儒教を基盤とする宗教構造の下、漢方医療が主流で西洋医療はほとんど導入されていなかった。このような環境の中で、ベッテルハイムは宗教・医療両面の活動を通じて地域社会との接点を形成した。

布教活動に関しては、個別訪問や民間での説教、礼拝の実施など多様な方法を用いた。史料によれば、住民の受容度は一様ではなく、警戒心を抱く者も多かったが、一部には信徒形成の兆しも見られた。また、王府や寺院の制約下で活動を行わざるを得ず、布教は常に社会的・政治的条件に影響されるものであった。

医療活動は、地元住民や船員、家族に対して内科・外科的治療を行い、西洋医療の技術や薬を用いたものであった。医療行為は単なる健康支援にとどまらず、布教活動の受容を促す手段として機能したことが注目される。診療を通じて住民の信頼を獲得し、宗教指導を受け入れやすい環境を整えた点は、布教と医療が相互補完的に作用したことを示す重要な事例である。

本発表では、1846～1847 年の活動を史料に基づき整理し、布教活動と医療活動の方法、課題、成果を具体的に提示する。また、医療活動を通じた文化交流の側面も考察し、琉球社会における西洋宗教・医療の受容可能性を議論する。これにより、宣教師の活動が宗教的側面にとどまらず、社会的・文化的影響を含む複合的なプロセスであったことを明らかにすることを目指す。さらに、他地域での宣教師活動との比較や現地史料の精査を通じて、19 世紀東アジアにおける宗教・医療交流の研究に資する知見を提供する。

歴史家朝河貫一と英文学
―イェール時代の読書および論文を資料に―

増井由紀美（敬愛大学）

1970 年代、1980 年代と、ターザンやマリリン・モンローを語りながらアメリカのポップカルチャーを学術的に紹介し、当時の英文学、特にアメリカ研究専攻の学生たちにその研究方法を示してくださった亀井俊介先生（1932-2023）が、2011 年には『英文学者 夏目漱石』を 2023 年には『英文学者 坪内逍遥』を出版され、近代化日本の英文学研究・教育事情を「講義」されている。この言葉をカギ括弧に入れたのは私がそのように読んだという意味であるが、これら研究・議論の中に朝河貫一（1873-1948）を置いてみることにより東京専門学校（のちの早稲田大学）文学科で受けた訓練が研究者朝可にどのような影響を与えていたかがより鮮明になることに気が付いた。比較法制史家・歴史家として学術的貢献を残した朝河であるが、Asakawa Papers（イェール大学図書館所蔵）に保管されてある論文・翻訳・手紙・日記の中にも日本における英文学教育の黎明期を探る手がかりが潜んでいる。今回の報告では朝河の文学活動（日記に記録された読書および手紙で交わされた文学論など）に焦点を当ててながら時代の特徴がどのように現れてくるか整理したいと思う。

ちなみに、これまで本学会の全国大会で報告させていただいた関連研究としては、第 53 回の「朝河貫一と夏目漱石：それぞれの『近代』」（松山大学 2016 年）および第 57 回の「朝河貫一の『ハムレット論』再考―日米のシェイクスピア受容について考える－」（岩手県立大学 2020 年）がある。

駒井権之助に関する新たな情報
－写真・肖像画資料、国際ペンと日本ペンクラブ－

西口 忠（桃山学院史料室 特別研究員）

これまで、報告者は駒井権之助に関して多くの報告と執筆を行なって来た。また日本英学史学会の会員によるものもある。日本英学史学会全国大会、支部研究会での駒井権之助に関する報告を以下に挙げる。

・皆川三郎「日英文化交流に尽くした詩人ジャーナリスト駒井権之助」（第 28 回全国大会[1991、福島]）
・西口忠「駒井権之助と内村鑑三」（第 29 回全国大会[1992、静岡]）
・西口忠「駒井権之助とキリスト教―英語をいかにして学んだか―」（第 30 回関西支部大会[1994、大阪]）
・大庭定男「日英新誌 1915-1938」（第 35 回全国大会[1998、大阪]）
・西口忠「日本における駒井権之助―新たな事実と多彩な人物交流―」（第 42 回関西支部大会[2006、大阪]）
・西口忠「ベアリング・ベアリング＝グールド（Barring Baring-Gould）父娘の日本伝道視察と通訳者駒井権之助」（関西支部第 54 回支部大会・第 27 回研究大会、2018）

まだまだ、駒井に関して分からないことが多い。ロンドンの恒松郁夫氏は英国における駒井の資料を多く所蔵しているが未見。『日本英学史学会報』No.147（2019.5.1）参照。
今回の発表では、駒井の孫（大阪在住）に送られてきた写真、そこには昭和天皇が皇太子時代に訪英した時の肖像画が写っている。駒井の友人であるオーガスタス・ジョン（Augastus John）の作品である。一方、某テレビ局から提供を受けた駒井の肖像画データ、これもオーガスタスの作品である。この作品は南アフリカ・キンバリーの一流ホテルに掛かっている。ここから見えてくることは何か。もう一つは国際ペンと日本ペンクラブの設立に関する最近の研究書と国際ペンのホームページに掲載された写真と資料から、新たな駒井権之助の人物像を紹介する。